廣讃寺ジャーナル

第12号
（発行所）
真宗大谷派
松岡山 廣讃寺
中村区城屋敷町3-30
TEL(052)411-5301
FAX(052)411-5341

蓮如さんの日

三月二十五日は――

親鸞聖人と聞くと『正座してだまって頭を下げたままで決して頭をあげてはいけない。相手様をみつめてもいけない』これが祖母からの教育であった。

蓮如上人と聞くと『あぐらをかいて正面を向いて蓮如上人を、さん呼ばわりをして、こちらから先に声をかけてもいいようだ』これは私の体験からくる気持ちである。

「かまへて我なき跡に兄弟仲は思ひあひて仲よくあるべし信心だに一味ならば仲もよく聖人の一流も繁定すべし」の遺言状ともいうべきものを残したのは三月十八日であった。

かくして一代の念仏者は三月二十五日大往生をとげるのである。自らしたためた法名に次の歌がそえてある。

「我なくばたれも心をひたむきに南無阿弥陀仏とたのめみな人」

毎月 二十八日は二十八日講・女人講

聖人のおことば

「信心ノサダマル トキ 正定聚ニ往ス」

「信心ノサダマル トキ 往生マタサダマルナリ」

「正念トイフハ本弘誓願ノ信楽サダマルヲイフナリ」

友人の林君が亡くなった。奥さんが言った。「ありがとう」とか、「すまなんだ」とか、ねぎらいの言葉を言ったことのない主人が死の寸前に言ったそうだ。「永いあいだすまなんだ」ぼっそり言って死んだそうだ。六十年寄り添ったわだかまりが一時に消えて奥さんに勇気がわいたそうだ。主人の命日を大切にしてやろう。そしていつまでも元気で生前以上に弔ってやろうと。

さて聖人の消息のほとんどは「他力」でうめられている。「他力」すなわち「本願力」すなわち「阿弥陀仏の慈悲」の世界である。救済に出合うことのない末法のわれらに一条の光明とはこのことである。

「我が名称えよ 必ず 救う」

ガザ地区の戦禍は拡大し、とめどなく両民族の怨は増大するばかりである。国連決議も分裂し両民族は自己の正義を主張するばかりである。聖人の深い自己反省(悪人)は現代世界には届かぬものだろうか。はたまた仏教徒の怠慢だろうか。

五帖御文

蓮如上人の書簡八十通を五帖にまとめたものである。証如上人の代に開板(出版)刊行され現代に至っている。

五帖で一組であるが平素は五帖目のみを拝読するから、皆さんのお宅には五帖のみの場合もある。巻末に

開板時の法主名がしるしてある。代々の御法主名は次の通り。調査してみてください。（和美）

大谷派門首年代

（本願寺）	（大谷派）	（氏　名）	（死亡年）
12代	1代	教如上人	慶長19年
13代	2代	宣如上人	万治 1年
14代	3代	琢如上人	寛文11年
15代	4代	常如上人	元禄 7年
16代	5代	一如上人	元禄13年
17代	6代	真如上人	延亨 1年
18代	7代	従如上人	宝暦10年
19代	8代	乗如上人	寛政 4年
20代	9代	達如上人	慶応 1年
21代	10代	巖如上人	明治27年
22代	11代	現如上人	大正12年
23代	12代	彰如上人	昭和18年
24代	13代	闡如上人	平成 5年

廃道

廃の意味は「すたれる」「やぶれる」「役にたたなくなる」と辞典にある。

廃屋・廃園・廃道・廃刊・廃墟（はいきょ）・廃業・廃止・廃寺・廃校・廃坑。思いつくままにあげてみるのだが、どれもこれも人間のにおいの消えてしまったことを表している。だが一方そこには郷愁がただよっている。

稲葉地学区にそんな場所が一つだけある。大正橋の手前、市内最後の信号を北に入る。神明社につきあたって道は左にそれる。五十メートルも行くとその道は雑草にはばまれて終わりだ。右手は庄内川の堤である。往時はここからが急な三〇度もある坂道であった。それをリヤカーの行列が日一日中つづいたものだ。津島街道から市内に入るための最大難所であった。右手にただ一軒、大朝さんのお店があった。農家の方々でいつもにぎやかだった。どのリヤカーにも犬がいて、仕事の一役を担っていた。ここに立つと役を終えた人生をしみじみと味わうことが出来る。

※行事予定（三月）

三月十四日（土）六時　同朋委員会
七時　同朋会総会
十九日（木）二時～四時　学習会

〔春季彼岸永代経・蓮如講　執行〕

三月二十日（祝）十時　おつとめ・委員長報告
おとき　説教　前田健　師
一時　おつとめ
三時　帰敬式
二十一日（土）三時　おつとめ・法話
二十二日（日）女人講報恩講
十時　おつとめ・住職法話
おとき
一時　おつとめ・住職法話
二十三日（月）三時　おつとめ・法話
二十八日（土）二十八日講・総会

※行事予定（四月）

四月七日（火）二時～四時　常任委員会
十一日（土）七時　同朋委員会例会
十八日（土）二時～四時　学習会
十九日（日）同朋会恒例旅行
・静岡別院
二十八日（火）十時　二十八日講・女人講